聖德太子御一生記繪抄

上

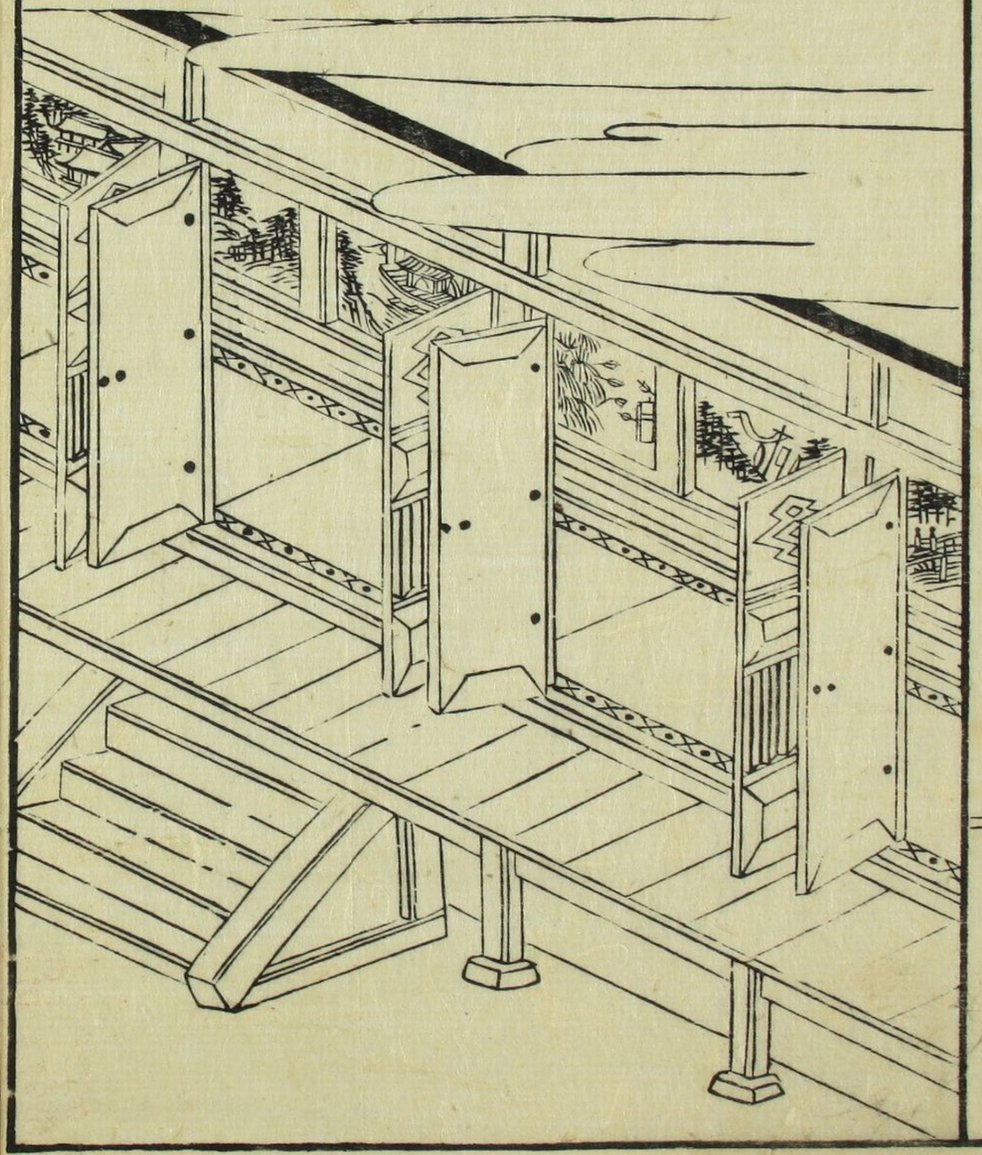
平かな絵入

聖徳太子御一生記繪抄 全部三冊

皇都書林　福井正寶堂

此書は聖徳皇太子御延生より御入滅まで御一代の
佛法興隆のため守屋大連との軍戦をはじめさまざまの事
不思議を彩しられ諸宗ふらぶ仏者に変られ迷ひ

聖德太子御一生涯畫傳堂



聖德太子御一生記繪抄上

御懷胎

人皇三十代欽明天皇世二年春正月元日の夜亦
四の皇子穐乃豐日尊の后妃間人穴太部の皇
女の御夢に金色の僧立てのたまハく吾救世の
願ひ願くハ吾ばらく后乃ちふ宿りんを
妃問たまハく是を誰人ぞと僧のたまハく
吾を救世の菩薩なり家ハ西方ひがしと妃ま

静嘉堂文庫

のこまハく奏がはく八垢穢すり何ぞ貴人を宿し
ものんと絶のけこまハく吾ハ垢穢を厭ふ唯のそむ
くハ勤く人間ハ感ぜんと妃のこまハく左之右之
命ハ随ハんと僧歓喜の色をなし躍て口中ハ
飛入ものと見るふて御夢寤ても喉の中ものを
のこのふが如し妃大きハ奇こし此よりを皇子ハ
告のふ皇子れのこまハく你が誕而ものふ聖人
ものんと是より後八月を経て浩はるの中ハ云

のふ御耳外ハ聞えり皇子を始め奉 大
ハ奇異乃思ひをなしのふとなり

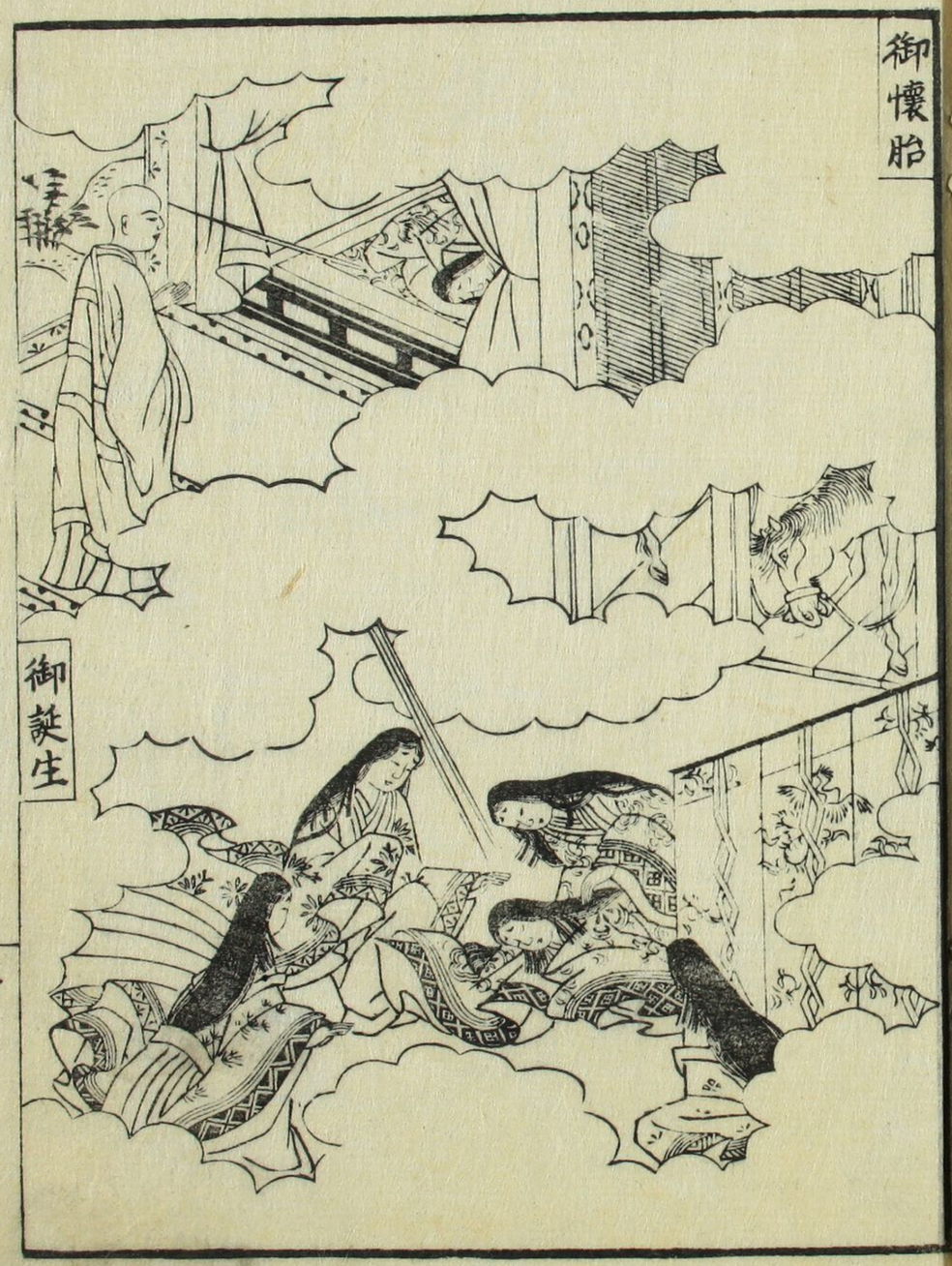
御誕生

敏達天皇元年正月元日后妃第中を巡りのふ
ハ厩の下ハ見えて御産ものふ女嬬ハ
ハ移ひて抱きまりいそぎ御寝殿へ入奉ハ
ハ聊も怖恙なく御安宿ものふ皇子
を始め奉侍従乃面くおど泣き集合のふハ

忽西方より赤黄の光り来て御殿内照耀
く幸良久しく止ざりしと称り

天皇抱太子

天皇御産のよりを聞しめし御駕を命じ
豊日宮ホ入御ある時ホまた光り御殿を
照耀す天皇奇異れ御感ありて群臣ホ勅
してのたまハく此兒ハ後かるべ世ホ異る事
なりんと即命じて大湯坐若湯坐を定め



桃花之御掘

天皇枹丈子
出佛舍利

沐浴なさしめ給ひ生後天皇襁を以て受て
抱きまつる次ぎに皇后次ぎに御父皇子次ぎに御母妃
の御懐を披て抱まつる太子は御身香しき
事云んかたなし生後三日は夕天皇御宴を
設け群臣に賜物あり七日乃久ハ皇后御宴
を設け後宮の官女に賜物あり大臣以下乃
人々も饌を獻じて御養産を祝し奉りぬ
又大臣大連等の女月益姫日益姫玉照姫の

三人ホ命じて太子ハ御妹母ホ定めゆふ夏
四月ホ至り太子熊云のごまし熊物語り
ゆふ熊人の挙動を知りしめして妄ふ啼
哭ゆふ事なかりしとぞ

出南無佛舍利

太子御誕生より右ハ手を握りゆふ御ふ
御二歩の去二月十又日ハ平旦ホ自ら東方ホむり
ハせゆふ合掌し南無佛と唱へゆふ御歩年

の中より佛舍利出現しゆふ体なり
抑世尊佛の舍利とハ太子御迄去世
天竺ホ釋尊の御在世の御時阿踰闍國波
斯匿王乃御娘少夫人誕し勝鬘夫人
に歸しなる容顔端厳聰慧明敏ふま
しく志ろも一乗甚妙の理を證し佛乃御
所ホおいて御發願ありく勝鬘経を誦
説しゆふ生後釋尊涅槃ホ入ゑを治ふ梅

檀の柴を積火葬しまする其寒灰乃下
ふ三斛六斗の佛舎利を留めゆふ時人々
彼舎利を分散あるゝふ波斯匿王ハ如来
の御眼睛乃舎利を得ゆひ浄姫勝髪夫
人ふ與へゆふ夫人佛舎利を深く恭敬
重ね金堂御後身大唐あくも六度まで
教化しゆふといへども彼佛舎利を失ひた
まひ後ふ南岳恵思禅師ぞうしゝ斯日

域ふ神魂を遷移ゆふ時も彼佛舎利を持
同人の皇女乃口中ふ飛入ゆひ用明天皇ね
太子と御誕生ましませる法ふ右の内
と掬り浄乳の下ふ着させゆふ妹母達懐
みまうとゝへども御出胎乃浄時ゝの重奇異の
御瑞相多けれハ宣てゆゑあるんとゝ
果して御二業ね云南無佛と唱へ彼佛舎
利を出ゆふ故ふ南無佛乃舎利と號しまし

抑佛舎利とハ如来の生身乃遺骨ゝ世
ゝ尊きもの多き物あるんや然中世南無
佛乃舎利ハ此末の御服時ハ舎利ゝ尊
き中の最大至尊なれハ太子ハ御前身
勝髪夫人ゝ生りし時より此末御七生乃間
生々世々放ちたまゝ未代乃衆生御化益
の為我寺ゝ殘し金堂内ゝ安置し給ふ
こゝ迄ゝ今もまれあるゝ是をのみ

日くゝ頂戴すゝ事偏ゝ聖徳法皇ハ大
悲ゝ世ゝ出ずんバ未世の衆生如何ぞ佛縁
を結んゝ恩ゝ厚恩を謝しまつるとすゝ
ゝ度なく唯感涙ゝむせぶのみ

桃花御遊

三月桃花の頃御父母ゝ太子を率ひ
後園ゝ遊ぶ御父太子ゝ向ひたまハく
吾兒何と謂ぞ桃花を樂と為や松葉を

賞と為や太子答てのたまく松葉を賞
ゆゑ為と又問てのたまふ何以答てのたまふ
桃花ハ一旦乃榮物松乃義ハ万年乃貞木
なるゆへふこれを賞しとせんと御父大ふ感
あり抱ませふ附ふ太子御身大ご香しく
きく世乃常の嗅ぬ所ぬ非ず時太子御父を
仰ぎ看てのたまハく兒御ふ入る事百丈
廿歳ふ登り千尺の浪ふ浮べるぬく大ご畏き

たゞ危〳〵とのゝきまふ御父国〳〵めー〳〵攘を
浮感淺かゝゞ御厚愛あゝせなふていまり

諸王子御闘

一日豊日乃御宮中ふ諸王子の御口闘ひー呼
ぶなふ浮参せ生御父皇子闘〳〵めー〳〵答を
吹く逃せなふ諸王子皆怖て逃竄なふ太子
ハ御衣を脱せなひ攘り進なふ帝父これを
問てのゝまるとく兄弟不和みて諸ふ兒等報

く口腕を今咎を以て誨を加へんと欲れ独り
ふ皆悉く隠避る汝何ぞ独り進来と太子
合掌して御父母ふ對て首を低き啓てのさ
まハく階を天ふ立ても外ることを能ハず穴を
地ふ穿ても隠る事を得ず故ふ身を進んで
咎を受奉らんと欲すと御父母大ふ悦び
まひ汝乃ち疑なることを以て只今のごとふなすと
て御母の手懐を抱て抱せまふ御身乃

蝦夷冠日本

太子遊後園中

香〳〵きこしめす常ふあ〳〵ばまたく御寵愛
あ〳〵せのふていをりり

太子拜賀皇后

太子御又案の玄豊御食炊屋姫尊敏達天
皇ハ皇后ふ立きのふの月太子御妹母ふ抱き
皇后の御前ふ行りまふ妹母ふ詔つ〳〵のさまハく
今日群臣系門し皇后を拜賀せん事前
ふ吾を膝〳〵より放し則大臣入ふ及んで放ち

まる太子みづから御身を顧て御衣袴
を調定て徐歩大臣の前に立北面して皇
后を再拜しまつる其起伏乃儀成人の如し
天皇皇后太子御寵異なりまつる妹母太子に
問たまふ曰く何以ふ群臣と共に毎しまつる哉
少し太子密かのたまはく汝が初生ふ所あくに
是吾天皇なりと後宴筵廿二年乃冬時
皇后御即位なりぬ推古天皇となりせまつる

其時太子儲君として摂政しまつりぬ
未嘗ふ君臣乃礼を成まつていまり

百濟國渡經論

敏達天皇六年冬十月百濟國より大別王
經論并律師禅師比丘等を將て帰朝まる
中を奏て生時太子天皇の玉座の下に伏り
申し奏てのたまはく兒情に持まる經論を
見と欲と天皇に問たまはく何乃由ぞ答て

のさまハ〳〵兒昔漢土ふ在く衡山の峯ふ住
し数十身を経て佛道を修行せしふ佛の
教を垂るふハ有ふ涙で無ふ涙で諸善を奉
行し諸悪ハ作事なきれとなり故ふ今百濟
より獻ずる佛経菩薩の諸論を見と欲
をと天皇奇ぶして又問たまふ汝年六
歳なり独り朕が前ふ参り何の日を漢ふ
あらん何を詞を言ふやと太子奏てのさ

まふ兒の前身意ふ慮る所なりと天皇此を
拝て大ふ驚き異ぶしまふ周の群臣も
大ふ舌を鳴し奇異の思ひをなせしと
なり

六斛日禁ふ教生

太子前年ハ経論を御覧あり〳〵奏てけと
まふ月乃八日十四日十五日廿三日廿九日三十日
是を六斛日と云ふ此日ハ梵天帝釋降りて

國政を見ゆるみ教生を禁じ人こゝを
仁乃基なり仁と聖と生心近しと天皇
大尓悦び勅を天下尓下し此日教生乃
事を禁尓断せしめゆと形り

新羅獻釋迦三尊

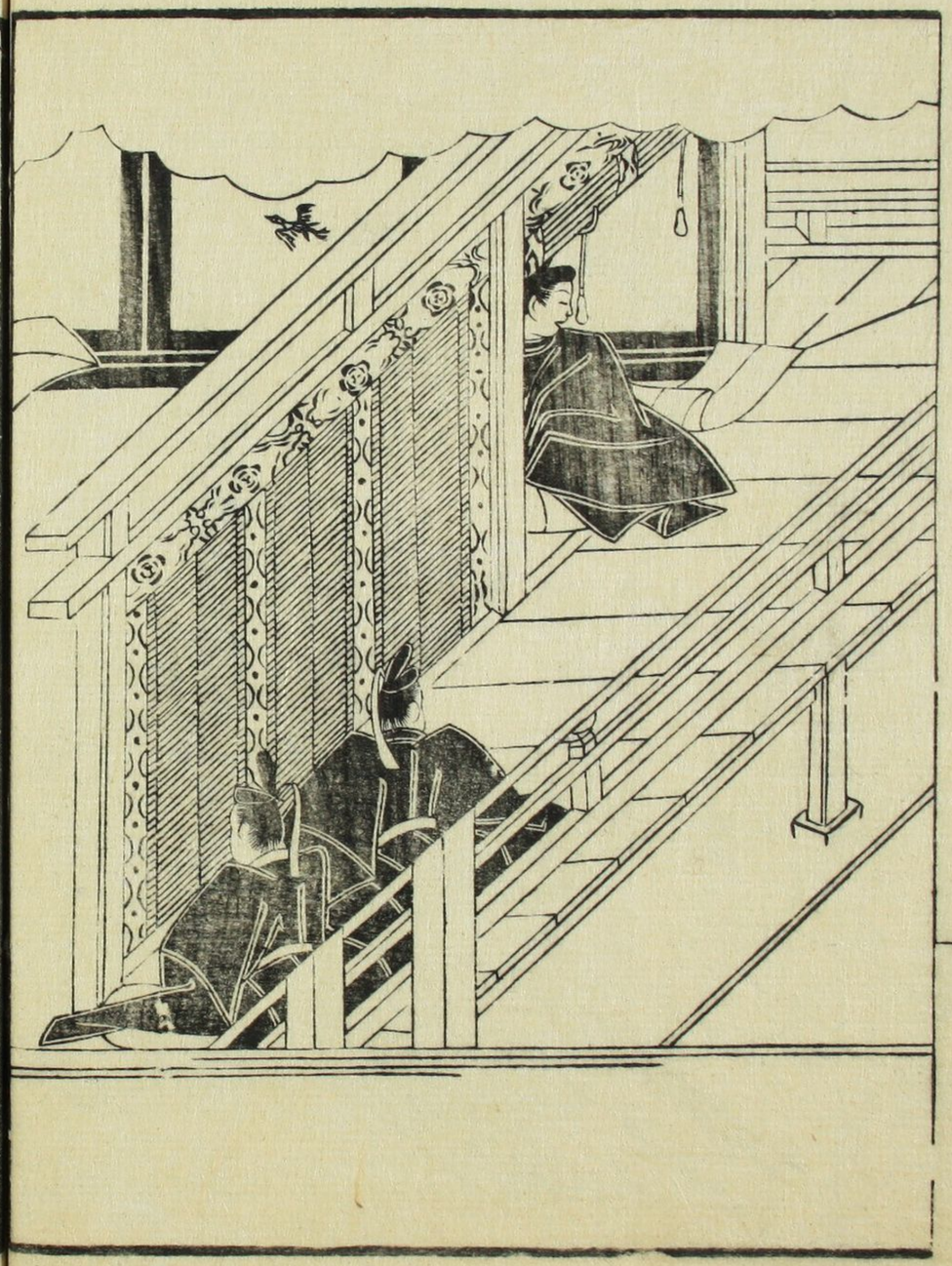
敏達八年冬十月新羅國より佛像を
獻ぜ太子御父皇子をして奏聞なさし
めたまハく西國の聖人釋迦牟尼佛乃遺

太子相ニ父天皇ヲ

誅守屋大連

遣使三道

百濟渡佛舍利及僧職人



像なり末世こゝを弓めバ禍を鎖し福を
蒙ふ又茂ゞする時ハ災を招き寿を
縮む兒ゞ讀佛經ふ生貴顕然なり浄ら
くハ佛像を崇貴し此説修の志ゑと
天皇大ふ悦びゆ安置供養し給
ひしとなり 沙世像興福寺
東金堂在之云云
土師連見化人
敏達九年隻六月人あり奏て曰土師乃

連八鴻とゝふ者能歌を唱ふ然るに夜か
く人来つゝ相和して爭ひ歌ふ音
都う岸ふあゝぐ八鴻一首乃和歌を詠ぜ
我々夜戸野伊羅伽ふ伽多爰古會和
曾多之伽ふ奈能連伊伽那久佐士毋
化人返
天空離ふ澄火く保師何種曽度豊
雌ふ都會

斯答て南の空ふ飛去奴八嶌異み追ひ
尋ふ住吉乃濱ふ到る天曉きバ海ふ入奴
と天皇より御側ふ太子侍りまして のゝさまハく是
奇怪惑星なんと天皇驚き給ひて
何乃謂そやと太子答てのたまふ天ふ又星
ありて五行を主る又色ふ象ふ歳星を色
青く東を主りて木なり熒惑星ハ色赤
く南を主りて火也此星降化して人と

なりて童子の間に拍び好んで謡歌を作り
未前の事を歌ふ必此星なるんと天皇
聞しめし大に怒こばせ給ふとなり

蝦夷冦日本

敏達十年癸巳二月蝦夷數千日本に邊境
を冦す其勢三億六万八千余先陣三韓の邊を侵す天皇群臣を召
征討の事を議しめ給ふ生時太子側に
まして群臣乃議論を聞とめ給ふ時に天皇

太子を召さ汝が意如何思ふ哉と問給ふ
太子答てのたまふ小兒何ぞ國乃大事を
議るふ是ん他た今群臣は議る不ハ皆衆
生を滅する事なり兒が意に以為先魁師
を召蝦夷乃軍大將なり教喩しめ盟を取且重祿を
賜ふく彼が貪性を棄ひ本落に放還し
たまハば可なんと天皇大に御感あり即
群臣に勅し魁師綾糟等を召て詔し

てゝさまハく汝蝦夷者むし大足彦天
皇乃世ニ敕をべき者ハ斬敕をべき者を放
帰し奴朕今彼前例ニ遵て元悪の者を
誅ちんと欲すと旋是綾糟等怖懼て服
て曰臣等蝦夷自今以後子〻孫〻清明
乃心を用て天闕ニ事ちん臣等若盟ニ
違バ天地諸神及天皇の霊臣ゞ種を絶滅
しゆへと云ふよりて悉く許し本國ニ還し

給ふ
或説を按ニ太子威神力を以て夷等を
服せんと思召て妹子臣を御供ニして
御馬ニ召陣所ニ到り給ひて御馬ニ鞭
掌てゆふゆ忽馬虚空ニ昇て飛こと
岩山ふのわらせ蹄をハ岩石を蹴倒し
ゆへハ海石悉く砕穴ニ落揺し蝦夷
等ゞ陣中へ雨の如く下り搏蝦夷等

大ホ怒つて山乃峯ホ登リ盤石を投打
太子御覽ありて蹴させ給ふに盤石空ヲ
騰り雷電の如く響て遥播列ホ落又毒
箭を射なきを御鞭をん投擲たまへば
其矢遥ホ飛ぐ紀伊の國ホ至る太子も鳴
鏑矢を射給ふ霹靂乃如く敵陣
を七匝〳〵上下ホ乱搏き魁師四將ならび頭
上を響飛軍賊皆此神力ホ辟易し
甲を脱き手を合せ頭を扣き降ると云云

太子拾後園中

太子春二月乃頃諸童子を率て後園の
中ホ拾ひ給ふ時ホ諸童子三十六人を太子
は前後左右ホ侍て御戯ホ諸童子は各く
思ふ事を一度ホ音を挙て問給ふ其
時太子ハ榻ホ居給ひて文〻の長く短
く中事を御音を仰て聞し召て御

返答あらせゆふに一句も隨事なくこの如き
御戯數日あるゝが加に彼童子世中を父母に
告ぐ父母奇ぶして私に或時難き辭を
作りて帝子に諮しむる悉く辯答し
ゆふ或時御父微行し角ゆふに稍解難
事多し世乃人此乃事に邪ぐ則后妃
に御物語なるゝ吾兒八殆聖人なるべ哉
や甚御感あらせゆふ又或時八諸童子と

弓石の御戯き或八輕く數十丈飛參せゆふ
或八疾走りゆふ事雷電乃如し各諸童子
乃遠ぶ所にあらぬとなり

太子視日羅

敏達十二年炑七月百濟國乃賢者韋北
達率日羅と云ふ者壮人なり勇みし
策なり常に身に光明ありとよみて系朝
ふ召則使に從て難波の館に來朝を紀に

太子日羅が異相あらせを聞しめし密に
御父に諮し難波乃敦に行き麁布れ
衣を御し帝面を垢繩を帯し馬飼乃
兒と御肩を連て日羅を見奉る時に日
羅牀に在太子を指て曰く那乃童子
ぞや是神人なりと人を遣し引入しむ
太子警き奉る日羅履を脱して走
り遥に拜し奉る太子隱て御衣を易直に

日羅が館に入る日羅地に跪合掌し白
言く敬禮救世觀世音大菩薩傳燈東方
粟散王と云太子も折磬して謝奉る日
羅身より光明を放つ事光乃如し太子
を御眉間より光を放奉る須臾あり而
止ぬ其後太子れのさまハくに子の命ハ尽なん
惜むべし害を被らんとのたまふ日羅答
曰く聖人すでに亡きぬ吾に如何せんと冊

外御清談終夕尓及ぶ人皆解する事を
得ざ冬十月晦日の夕人あり事日羅を害
せんとす

将来弥勒石像

敏達十三年秋九月弥勒の石像を百済國
より将来せ太子御自あらせ給ふ体なり此石
像ハ蘇我の大臣乃宅ハ東尓佛殿を営
みて安置しまつる今ハ元興寺乃金堂ふ

ねりとりへる

守屋焼豊浦寺

敏達十四年丙午二月太子玉座の下尓侍りふ時尓
天皇問たまハく我國の基ハ神をハ主とし給
尓今大臣蘇我馬子異國乃神を祭らんと請こ
を如何せんと太子奏てのたまふ諸佛世尊
ハ三道微妙なり諸神是尓隨て敢て佛
尓違ひ今大臣佛法を奥ぜんと請ふ

主國家乃福なりとのたまふ則天皇
詔して宜く大臣を遣べしと許ます然に同
年三月國中に疫病ありて死る者多し
物部乃弓削大連中臣丸勝海の連等奏て
曰く先天皇より皆下に至て疫病未曾こ
れ蘇我の臣等佛法を興行するゆへなり詔
して佛法を斷しめたまふ大子奏てのたまふ
二臣未因果の理を悟らず善を修せバ福至
り惡を行せば禍来ること自然の理なり
則佛教なり今乃疫病も德を除バ可
なりと二臣聽ぎゝみずして寺に詣て豊浦寺
堂塔を斫倒し火を放て二寺を燔焼る
佛像を難波乃堀江に棄三尼を法衣
を奪ひ笞を加へ辱しむ世日雲なきに大に
風雨を附て又國民疫を發し死る者
國中に充滿て疫を患る者の曰く痛

事燒所ゞ如こし小佛像を燒る罪をうと
太子御父に謂てのたまはく二臣破法の
報ひよりゝ此疫癘をうれ祈請して
脫せしめんと則太子御父と俱に香爐を
擎げ佛を禮しまつる夏六月蘇我大臣
疾をうり三寶を祈らんと願ふ天皇勅し
召大臣獨り祈ふ事を許しまつる二臣ゝり
佛法初ゝ興まりこなると

公
恭導奉持